

一年の経過 永田忠夫

1. 観察法の検討…私達が、同じある事象なり対象なりを観るといっても、個人的な「過去の体験」に基づいて観るために、注目する視点や認知の仕方が非常に異なっている。この事は、例えばロールシャッハ・テストの反応のパラエティを見ても、クライアントの悩みを聞いても、感ずる事である。ところで、心理学のデータ収集の一つの方法として観察法があるが、観察者を使用するために、観察者の「個人的な過去体験」が持ち込まれる。しかも、「個人的な過去体験」と言えども、どの観察者にも共通な認知をもたらす様な体験と、きわめて個人的な認知をもたらす体験がある。従って、観察者間で結果の不一致が生じてくる。観察法を使用する際、この観察者間の差を十分検討し、結果の一般化できる点と、一般化できない点を明らかにしておかねばならない。こうした観察法の信頼性の問題を取り上げ、観察法の限界を明白にするため、現在、観察者の観察結果を整理している段階である。

2. 過疎地域における村民の意識調査…過疎地域に入って、人間の流出ということが村民個人にどの様な影響を与えているかについて、面接法を用いて、純教授等とデータを収集してきた。その一部は本紀要に載せら

れている。今後データを個人特有な認知の仕方と、共通な認知とを明白にしつつ、人間流出によってもたらされる意識の変化を検討していきたいと思っている。又更に、流出していった人々の面接資料等を検討しつつ、人が、行動の選択をする時の決定因や意識構造も明らかにしていきたいと思う。

3. 臨床活動…精神病院に週一回研修に行き、精神病患者とのかかわりの中で、目前にいる病める、あるいは悩める患者の内的世界に少しでも入り込み、私と彼との間で、たがいに成長することを目指してきた。特に、精神分裂病か神経症かの境界的な患者との間での臨床活動が主たるものであった。そうした活動の中で、臨床心理学を学んできた私の役割とは何かについての課題は残されたままであり、今後も考えつつ、臨床活動を進めていきたい。

4. その他…科学研究費の援助を得て、他大学との交流を深めつつ、大学生の適応異に関する研究にかかわり、スクリーニングテストの問題を中心に検討しつつあるし、学生相談室の室員としての活動もしてきた。又、当教室のクリニックや、自閉症の治療過程の分析にもかかわってきた。

一年間の研究経過報告と今後の課題 植村勝彦

個人研究

日常生活の諸行動に果す「期待」の役割の重要性に注目して、一例を「青年の職業生活」に求めて、「期待」の構造を因子論的な観点から取投ってきた。「期待」の言わば解剖学的構造分析については、1970年度教育心理学学会総会で、類型学的構造分析については、同じく1970年度日本心理学会大会で、夫々発表してきたので詳細は論文集に譲る。これらは未だ試論の域を出ないものであるので、今後、変数の吟味を通して一層の因子の精練を加えることが課題とされる。一方、それと共に、「期待」研究の本来の目的である機能分析の面にも着手されねばならない。日心大会論文集にも記した如く、職場問題を例にとれば、「期待」と現実とのギャップが、行動としての転職、不適応行動、生産性低下、等々に連がると思われざるからである。従って、構造分析から得た軸を測定変数として取出し、それと行動との関連性について実

験を試みるべく、目下考慮中である。

更に、この研究の展開の途上で、「期待」を包含する概念としての、Lewin, K の言う「時間的展望」のうち「未来の時間的展望」(F. T. P.) の概念に行き当たり、現在、両者の関連性の明確化を期する上からも、関心が向きつつある。かなりの資料を得ているので、いずれこれ迄の研究成果を論評すると共に、自己のデータも付加して発表したいと考えている。

尚、「期待」研究の現在迄の結果についても、論文としてまとめるべく、目下、資料及びデータの再検討中である。

共同研究

「過疎地域」研究

従来より「地域社会」に重点を置いた社会心理学に関心を持ち続けてきたが、幸い、今年度教室の研究班の一つである「過疎地域の家族関係」を調査するべく組織された、純教授をチーフとするグループの一員として参加